

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年3月31日

報告書（資金）：平成30年度 完了報告書（JPF）

平成30年度 JPF 完了報告書

| | | |
|-------------|--|---|
| 事業名 | ナンガハル県及びクナール県における国内避難民及び帰還民の子どもの保護支援事業 Child Protection Assistance to Returnees and IDPs in Nangarhar and Kunar Province | |
| 事業対象地 | アフガニスタン クナール県・ナンガハル県 | |
| 事業期間 | 2018年4月1日～2019年3月31日 | |
| 公的資金種別 | ジャパン・プラットフォーム | |
| 支出・返還金額 | 総支出：42,323,814円（返還金額：2,765,250円） | |
| 事業の成果（概要） | 本事業では、アフガニスタン東部のナンガハル県及びクナール県において、国内避難民及び帰還民の子どもの対象に、1) CFSの設置と運営を通じて、子どもたちに安全で快適な場所での心理社会的支援の機会を提供した。また、2) 学習コースを通じ、学習の機会を失った子どもたちに安全な教育の機会を提供した。さらに、3) 児童数過多により教室が飽和状態にある学校に仮設教室を設置し、学習キットを配布することで、劣悪な教育環境の整備に貢献した。 | |
| 事業実施後の個別の成果 | ナンガハル県及びクナール県の4つの郡において、4つのCFS（Child Friendly Space、以下「CFS」）を開設し、子どもにやさしい空間の運営（お話し聞きかせやお絵かきなどの活動のほか、月例イベント）を通じて、子どもたちに対し心理社会的支援の機会を提供した。麻薬使用防止や環境教育、人権啓発などを盛り込んだ月例イベントを実施し、3,436人の児童が参加した。得た学びは、遠隔実施における意思疎通の重要性と工夫の必要性である。 | 対象地域の帰還民、国内避難民、ホストコミュニティの子ども合計809人（累計66,988人） |
| | 4つの学習コースを開設し、335人が登録され1日平均23人が出席した。出席率などの基準をクリアした合計288人の児童が、学習コースで学習したことを証明する書面を受け取った。得た学びは、教育を受けられていない児童に教育の機会を提供するための工夫の必要性である。 | 対象地域の帰還民、国内避難民、ホストコミュニティの児童335人 |
| | 2つの郡の3校を対象にし、合計5棟15教室の仮設教室を設置した。設置後のモニタリングにおいて、当該教室を利用している児童は合計1,947人であり、目標値に対して135%を達成した。教訓は、資材費高騰による設置費用の変動への対応と、天気によって左右される設置工程のスケジュール管理の徹底の必要性である。 | 対象校3校の児童1,947人 |
| 教訓・提言 | 学びや教訓としては、1つ目に、遠隔での事業実施における現場と本部のコミュニケーションである。事業目的や各種成果のための活動の共有を行っているが、遠隔の | |

団体名：シャンティ国際ボランティア会

国名：アフガニスタン

日付：2019年3月31日

報告書（資金）：平成30年度 完了報告書（JPF）

| |
|--|
| <p>ため活動の意図について十分に共通理解を得ることが難しいケースがあった。例えば、本事業では、CFS に来館した子どもの数を数えることで、どれほどの子どもに活動を提供できているかを測ることを目的としていたが、現場ではCFS に登録された子どもで来館している子どものみを数えており、一定期間は実際の来館者より少ない数が報告されていた。来館した全ての子どもを数えるということは、直接話す機会が多ければ自然と伝わっていた事項と思われ、第3国会議の重要性が増した。2つ目に、データ取得の難しさである。本事業では、どの程度質的なデータが取得可能か実験的に試みたが、例えば心情を尋ねるインタビューでは子どもが大人の男性に対し思ったことを自由に表現できないなど、事業担当者だけでは十分なデータを得ることが難しいケースがあった。また、フォームの使い方やデータの取得方法に課題があり、結果的に現地スタッフが独断でフォームを一部改訂して使用するなど、1つ目の学びにつながる点もあった。事業途中からモニタリングに特化したスタッフを追加することで、モニタリングを通じた事業の改善ができるようになったことから、モニタリングスタッフを別途雇用することが重要であった。</p> |
|--|